



子どもの発達障がい ...
その特性と対応について

NPO法人21世紀教育研究所

子どもの発達障害 ... その特性と対応について



「この子は、なんでこんなに育てづらいのだろう...」



「なかなか勉強ができるようにならないのは、なぜかしら？」



「うちの子は、人間関係でトラブルばかり起こしている」



などなど、子育てには苦勞がつきものですが、常識的な考え方やつきあいかたでは、うまく育てていけない...そんな場合もよくあるものです。

しかし、あまりにも手を焼く場合、もしかしたら脳神経的な特質から、そのような問題が起こっているのかもしれない。

近年、発達障害の研究が注目を集めています。

この冊子は、エビデンス（根拠）ある研究結果に基づいた援助を提供している実践家による発達障害の報告とその関わり方について、具体的にアドバイスをしたセミナーをまとめたものです。

【講 師】 石川京子 氏 [東京大学大学院教育学研究科修了（教育学修士）、臨床心理士 キャリアカウンセラー]

子どもの発達障がい ... その特性と対応について



一色：はじめに、当団体について簡単にご説明いたします。二十一世紀教育研究所は、1994年に「不登校生の支援」という立場からスタートしました。その後、さまざまな領域で実際に相談を受けたり、一緒にかかわったりすることもありましたが、諸外国・国内を含めて、制度の紹介や制度改革の手伝いをずっと続けてきました。現在も、不登校生の数字は昔とあまり変わらない状態です。私たちはいつも話をしますが、アメリカに行けば、「不登校」という言葉や「行かなければいけない」という概念すらありません。既に、そこからスタートが違っています。行かなければいけないから、不登校が生まれてきます。別にプレッシャーをかける話ではないと思っています。

いろいろな学び方があって、いろいろな生き方があって、本当の意味での個性を認めていく視点を立ってあげれば、自然と不登校はもっと減ってくると思っています。そうはいっても、現在、不登校はたくさんあります。ただ、全体からすると、2、3%です。

「発達障がい」という言葉自体も、つい最近聞かれるようになったばかりの言葉ですが、既に、「5%」とも、「10%を超えている」とも言われています。私自身も現場に身を置いて、確実にこの10年が増えてきている実感を持っています。

ところが、適正な対応の仕方をわれわれ自身がまだ身に付けていないと思っています。思いだけでできるものも当然あります。ただ、理論をきちんと身に付けることによって、クリアできることもたくさんあります。そういったことが、諸外国に比べて、日本はかなり遅れていると私自身も実感しています。

石川さんは、なり幅広い活動をしていますので、今日は、現場の視点からさまざまにわかりやすく解説も含めてしてもらえます。自己紹介を兼ねてスタートをお願いします。大体1時間ちょっと話をしてもらって、その後1時間ぐらい、皆さんと話のキャッチボールをしてもらいます。ぜひよろしくをお願いします。

石川：石川です。どうぞよろしくをお願いします。

わかりやすくということの評価できるのは私ではありませんので、「これは、いったい何の話をしているのだ」ということがありましたら、「わからない」という顔をしてもらえれば、できるだけキャッチしたいと思います。

最初に、私どもがかかわっているNPOが、どんな活動をしているかの話を簡単に、そのあとに自己紹介をします。

われわれは、リンケージという団体です。「リンケージ」というのは、つながっている状態を表す言葉です。子どもたちあるいは若者が社会と何らかの接点を持つ、つながっている状態をサポートできればという思いを込めて付けました。

われわれがメインにやっている仕事は、発達障がいのある若者の就労支援です。既に学校を卒業して就職活動をしている方から、今は高校生、大学生、専門学校生が仕事に行くまでの移行期の支援が一番メインの仕事です。

就労の移行までの支援をしている中で、子どもたちがさまざまな発達・成長の過程で残念ながら積み残してきたものは、学習のチャンスが与えられなかったことだと思っています。そういうところも少しずつさまざまに見えてきたこともあって、だんだん対象の年齢が下がってきて、今は2歳半からの発達支援の活動をしています。

一方、私は、大体2歳半ぐらいの子どもを担当することが多いのですが、おおかたは高校生以上の就労支援をメインにしています。

今日は、「子どもの発達障がい」ということなので、比較的幼少期から学齢期の小学校ぐらいの方を念頭に置いてお話をいたします。残りの1時間の中で、もし、先生方で就労期あるいは青年・成人期を担当している方々がいらっしゃれば、少し話を一緒にしたいと思っています。

今日は、まず、私たちが考えている発達支援はどういうものか。その目的は、こんなふうを考えているということをお案内したあと、そもそも発達障がいをどう捉えるかを案内します。そこまでは、本を読めば大体わかることなので、実際の対応はどうするのか、現場で子どもたちと向き合ったときにどんなふうにかかわっていくのかを少ない経験ですが、事例をお話します。



には順番あるいは段階がある」ことです。人間は、皆さん、私も含めてこの年齢に達するまでに、いろいろなものが順番に段階を追って調ってきます。

例えば、遊びの発達でも、小さな子どもを見た方は、思い当たることがあると思います。私たちは、大抵最初は何かをいじったり、見たりする一人遊びから始まります。そのあとに、複数になってくると、並行遊びを始めます。違うもので遊んでいる隣の子をちょっと意識しながら遊びをします。そのあとに、今度は対面で同じものを使いながら遊び始めます。そのあとに「順番」という概念が入って、そのあとに「ルール」です。ここで、集団で遊びができるようになってきます。こういった遊びの発達を辿ります。

お座りをする VS 歩きまわる



発達には順番、段階がある

例：あそびの発達



よく保育園とか幼稚園で発達に何らかの偏りがある、友達と遊ぶのが苦手だと思える子どもが、いきなり集団遊びに入られることもあります。でも、その前の段階で誰かが隣にいても遊べるとか、誰かが目の前にいても、その空間を共有して遊ぶことができるという発達の段階を経っていないと、集団で遊ぶことは、とても難しくなってきます。

ペースは別ですが、このようにさまざまなもののおおよその順番は、大体決まっています。ここがポイントの一つです。意外にマジョリティーです。

大方の「定型発達」と言われている子どもたちは、通常、人間はこんなふう発達していくだろうという順番どおりに育っていく子どもたちです。

今、われわれがテーマにしている発達障がいの特性を持った子どもは、どこかの部分で自然に任せていると発達しにくい領域があります。

「そのうち何とかなる」とか、「ちょっと奥手だけど、そのうち追いつく」という言葉も多々聞きます。そうなる子どももたくさんいますが、実は、その自然の流れだけに任せていたら、なかなか育ちにくい。強いては、周りから見ると育てにくい子どもという印象が固まっていきます。

発達障がいの特性を理解するのは、一つは、自然に任せていたら、なかなか発達しにくいその子独自の領域をきちんと理解して、もし、その領域が障がいされているようであれば、「頑張れ」と言ってしまうように支援していくのではなく、むしろ、その発達を補完するほかのかわりを探していくことが、「発達支援」ということだと思っています。

例えば、具体的に言うと、今、ここにいる皆さんは私の話を聞いてもらったり、書いてあるものを見ながらメモを取ったりしています。小学校ぐらいでよく見られるのは、なかなか字が書けない子どもがいます。

今、就労支援をしています。就労支援で彼らが書くのが一番困るのは、履歴書です。字や脱字ぐらいだったらいいのですが、書いてる字が読めません。今は若干変わってしまいましたが、「履歴書は手書き」というのがこれまでの通念でした。

「字は人を表す」とか言って、履歴書で字を見ながら評価されてしまいます。この字を書くことがなかなかうまくいかないの、もしかしら、この子は字を書くという発達に至るまでに、何らかの困っていることがあることに気が付かないと、「漢字を10回練習してきなさい。宿題です」と言って、一生懸命慣れさせて書かせようとすることがあります。

それでうまくいく子はいいのですが、実は、それでうまくいかない子はたくさんいます。試しに皆さん、やってみてください。ペンを普通に持って、何本かで持ってもらってもいいですが、手首を使いながら字を書いてください。

よく、こういう子どもがいます。これはちょっと極端かもしれませんが、こういうふう全部で持って手首を使って、皆さん自分の名前を余白に書いてください。多分、あまり上手ではないと思います。

例えば一つには、人間の手はパーツが全部そうですが、役割分担がさまざまできるようになっています。親指と人差し指は、つかんだりします。こちらの三つは、固定する役割です。ですので、皆さんが字を書くときは、下に固定されて書くだけです。親指と人差し指と中指の部分だけで字を書くので、小さな字も書けるし、安定して書けます。

これは、「微細運動」とか、「巧緻運動」とか言いますが、この手の役割分担がうまく発達していない子どもたちがいます。そうすると、手首が動いてしまいま

発達支援のPOINTと目的

まず、「発達支援のポイントと目的」です。ここは、皆さんも通ってきているところ。私たちは、お座りをするのと歩き回るのとどちらが先だったか？ 私たちはこの頃の記憶はありませんが、皆さんの子どもあるいは姪御さんとかが近くにいれば、すぐわかります。人間は誰しも、まずはお座りができて、そのあとに歩き始めるといった段階を辿ります。

発達障がい・発達支援を考えると欠かさない一つの大きなテーマは、「発達

手首を止めるとか、小指が止まるということがなかなかうまく固められないので、結局何回書いても、「だめだな」と言われます。

そのときには、実は、やはり手の使い方を教えてから、字を書かせることがとても必要です。そういうときはどうするかというと、好きなキャラクターを上に乗せて、つかんでもらいます。

皆さん、小指と薬指と中指でつかんでもらって、親指と人差し指だけで、このわんちゃんをぐるぐるします。そうすると、人差し指と親指だけは動いて、小指は固まります。「このわんちゃんをどんだんに沈めないで、顔を出しておいて」と言いながら、ずっとやらせていると、小指の部分の固めていくことが脳に刺激として入るので、そうすると書字が安定してくることがあります。

こういった書字の苦しさは、手の動きの発達がなかなかうまくいかないのが、字がなかなかうまく書けないという子どももいれば、もっと違う図形認識、目から見た図が脳になかなかうまく入らないことによって、文字を文字として認識しにくいのが故に、書き写すことができず、書字がなかなかうまくいかない子どももいます。

あるいは、眼球運動がうまく発達していなくて、文字を書くときに目が動かないので書けない子どももいます。

ちょっと試します。皆さん、頭は固定したまま、資料を左から右に動かして、書いたものを頑張って読んでください。一度ぐらいただと見えるかもしれません。今度は、反対に書類は置いて、左から右に首だけ回してください。文字はちょっと小さいのですが、読める文字がありませんか？ これは、眼球運動がされていることによって、脳が、今左から右に動いたという指令を出すので、目がある一定のところを押さえられるようになります。

でも、この眼球運動が発達していない子どもがすごく多いのです。よくあるのは、「黒板の字を書き写すのがとても遅い」と言われることがあって、ノートが取れない子どももいます。実は、書字、字がなかなかうまく書けないことに関しても、今は三つか四つぐらしか仮説を出していませんが、もっとたくさん仮説は考えられます。

われわれがその仮説を知らず、今までどおりに、「頑張ってちゃんと書け、宿題だ」と言って何度も書かせることによって、本当にその子の字がうまくなるのでしょうか？ もっと重要なことは、なかなかうまくいかないことによって、その子たちが自信を喪失してしまわないでしょうか。「もう小学校五年生なのに、何でおまはいつまでそうやっているんだ。練習が足らん。宿題は倍だ」ということもあって、実はその特性が理解されないが故に、とても苦労をしています。

できるようになっても、それは周りもできていることなので、とても努力をしているのに、ほめられることも特段なかったとしたら、実は、ポイントは、その子どもたちの自信、「自分はやればできる」とか、「こんなところが俺っていいところだ」といいたい気持ちを損なう可能性があります。

でも、想像してみてください。自分にいろいろ自信がなくて、何度練習してもうまくいなくて、その子たちが大きくなって、仕事をしようと思って、「よし、じゃあ、一流会社を受けるぞ」とか、「ばりばり仕事をするぞ」と思えるように、育ちがサポートしてくれるでしょうか？ そういう方ももちろんいます。でも、われわれが新しいことをチャレンジできるのは、自分に対する何らかの自信があるからであって、これはどの子も同じです。自信を醸成するための情緒の安定は、欠かせないと考えています。

私のメインの業務は就労支援なので、とても多くの発達障がいの特性を持つ若者を見えています。とてもよき働き手である方は、たくさんいます。でも、残念ながら、その育ちの中で自信を積み重ねていくチャンスがなかなかなく、「そんなことはないだろう。そんなにできないのだったら、それは頑張ってない証拠だ」と否定されてしまったが故に、発達障がいという障がいは、一つの二次障がいですが、そこから引き起こされる二次障がいでもっとも傷ついている子たちが決して少なくありません。

私の仕事は臨床心理士ですので、どちらかというと「心身の健康」がテーマになります。そういった場合に、発達障がいの特性があるだけでも通常より頑張らなければいけないこともたくさんある中で、二次障がいを持っていると、本当に大変になります。二次障がいの治療を先に進めなければいけないので、社会に再び接点を持つ機会がどうしても遅れがちになります。それによって、さまざまなチャンスが奪われてしまうこともあります。ですので、われわれが発達支援を考えるときには、その子どもたちの将来にわたって自信やいいところを伸ばしつつ、サポートしていきたいと思っています。

それをまとめると特性理解は、二つあります。一つは、発達障がいそのものの理解です。もう一つは、全員がほとんど違った特性の組み合わせなので、その子どもあるいは若者が持っている個別の特性の理解です。書字だけで言っても、いくつか考えられる特性があります。そしてその対応です。そこに支援の手を入れるかどうかは、その子どもたちが暮らす環境の中で、必要かどうかという点もあります。

例えば、小学校・中学校・職場、何でもかんでも特性に対応して、全部対応しなければいけないのではなくて、それぞれの小学校の中だったら、小学校の学習がとても豊かに進む、楽しく学校生活を過ごせる、そのために、何らかの特性が本人の困り根につながっているようであれば、その部分に手を入れていくことです。

どういうことかという、例えば、「パニック対応」とよく言われます。でも、これは実は、周囲が困っているの、パニック対応はどうしたらいいかとなるのが、第一義です。手をつけられなくて、自傷行為で頭をぼんぼんぶつけて、どこかに飛び出してって大変なので、このパニック対応をどうするかという話になることが多いです。

本来目指すべきは、その子どもがその場所、小学校のクラスの中でたとえパニックが起きたとしても、自分でそのパニックを何とかコントロールできることです。そうしたら、安心して、またクラスの中で授業が受けられます。本来の発達支援を考える最初のスタートは、そこだろうと思います。

パニック対応というと、「頭と首を冷やしてください。静かなところに行かせてください。それでもだめだったら、少し圧を入れてください」とかやります。

それは、われわれの対応であって、それによってその子どもが、「こうすれば、僕は、こういったパニックは起きるけれども、何とか元に戻せて、また、プラスに戻っていける」という子どもの力にしていけることが、発達支援だろうと考えています。ときどきうっかりすると、周囲の大人は、その場を何とか対応していくことに目が移りがちですが、本来の発達支援は、その子どもたちが、その社会の中で安心して自信を持って生きていくために、その特性に手を差し伸べていくことだと思っています。

POINT.1

定型発達の子どものように、
自然に発達しにくい領域がある

そのために

子どもそれぞれの特性理解

=得手・不得手はみんなそれぞれ違う

※Aさんに役立った支援はBさんにも役立つ

適切な支援

=得手を伸ばし、不得手を補う

※まんべんなく普通にできるように支援する

POINT.2

幼少期から大人まで
情緒の安定(=安心)は重要なテーマ

社会で力を発揮している
発達障がいを持つ大人はたくさんいる

一方で、二次障がい(不安・自己評価の低下・怒り・恐怖・
強迫行動・抑うつ・被害意識・社会的逸脱行動など)で
傷ついている子ども・大人は少数ではない。

脳の機能障がい...脳の中でちょっとした不具合が生じている

このあたりから、「発達障がいとは何か」ということになってきます。これは、この会場に来ている皆さんには、おなじみのことだと思いますが、脳のどこかの部分に、ちょっと不具合が起きているということです。いつも説明するときに、こういったかたちで説明をします。

脳の機能障がいは、脳に何らかの不具合が生じています。では、「いったいそれは何なのだろうか?」と思うことはありませんか? 「脳のタイプが違う」とか、「自閉脳がある」とか、「機能が障がいでいる」と言われることが多々あると思います。私なりの理解で紹介すると、われわれは、もともと生まれたときに、脳の中に神経細胞があり、それは、電球だと思ってください。

ある一部分は、生まれてすぐ活動ができるように、ちゃんと配線工事は終わっていますが、他のほとんどの部分は配線されてなく、電線はつながっていない状態で生まれてきます。

下の図のイラストに赤字で「刺激」と書いてあります。例えば、赤ちゃんが寝ていて、自分の上でピカピカ動くものを見て、「ああ、何か動いている」という刺激が入ることによって、スイッチがオンになり、視覚情報がだんだん発達していきます。

私たちが最初は見えなかったのです。ぼやんとしているのですが、だんだんいろいろ動くものが、目を通して自分の脳の中で配線工事がつながって、視覚をつかさどる脳のところが元気になって、ピカピカと電気がつくようになります。そしてそれがどんどん太くなっていきます。

赤ちゃんはたくさん配線工事をやりますが、ある一定の時期になると、使われない配線は、無駄だからだんだんなくなっていきます。これが通常の定型発達で、何らかの刺激が入ることによってオンになって、配線工事が進んで電球がつくように、目が見えるようになっていきます。

発達障がいの何らかの特性があるときには、こんなふうに使われています。電球は、ほとんど同じように持っているけれども、例えば、その配線工場の電線がちょっと細いと、電流が流れにくく、少し薄暗く、反応が鈍かったり、あるいは、本来は一つのところにつながるはずのものが間違えて違ったところに配線されて、二つ反応するようになっていたり、あるいは、年齢とともに配線工事がされていくものが、自然にはなかなか配線工事が進まないが故に、電球がずっとつかないでいたり、あるいは、オンとオフをつかさどっているイラストの「僕ちゃん」がなかなかうまく動かず、ずっとオンのままの場合があります。

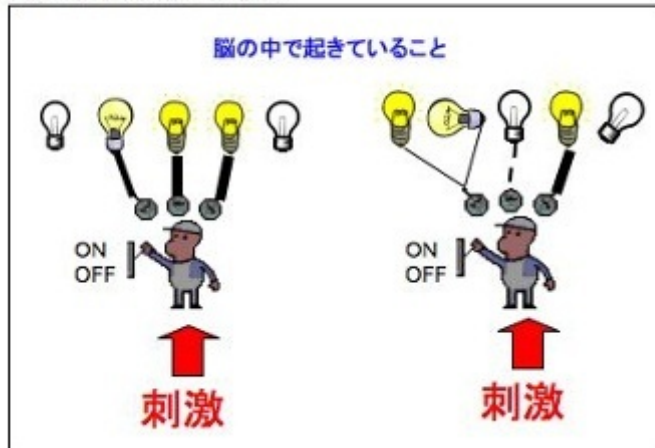
どうということかという点、この会場はとても静かなところですが、少し外の音とか、蛍光灯の音とかがあります。そういう音が全部入ってくる感覚過敏の子どもがいます。この刺激がずっとオンです。われわれは、どこかで要らない音はオフにしています。私の声だけに集中できるように、皆さん、オンとオフをしています。それが、全部がオンになっていたりします。

恐らく、脳の機能障がいというのはこういうかたちで入ってくる感覚のオンとオフがうまくいかなかったり、配線工事が自然にうまく到達しにくかったり、時々細すぎで、明かりがなかなかつかなくてぼやんとしたり、こういったことが、子どもたちの脳の中で起きています。

難しいのは、脳の中なので見えないということです。見えたら、「もしかしたら、感覚のところは過敏ですかね」ということも言えますが、そこが見えないことが、発達障がいの傾向がある子どもたちが苦労するところでもあります。

その配線工事あるいは電球、スイッチの「オン・オフ」がうまく作動しない、ちょっとした不具合があることによって出てくる障がいの特性が、それぞれの発達障がいの特性です。

つぎに自閉症スペクトラムですが、スペクトラムは虹のようなものですから、とても自閉度の強い特性からほとんど目立たない特性まで含めて、「自閉症スペクトラム」と言います。「自閉症をスペクトラム」と言うにあたっては、つぎの三つが共通項で、特性として持っています。



自閉症スペクトラムの特性

- 社会性のかたより
- コミュニケーションのかたより
- 想像性(イマジネーション)のかたより

一つは、社会性の偏りです。これは、年齢相応の常識が自然には身に着かないということが代表されます。

二つ目は、コミュニケーションの偏りです。コミュニケーションは、聞いて理解する部分と表現をする部分の両方です。ここに何らかの偏りがあります。

そして、三つ目の想像性は、今は「イマジネーション」と言われています。イマジネーションの偏りは、見えないものが想像できません。一番見えないものは、1分後、1秒後は見えませんので、先の予定が見えなくてわからないと想像がしにくいので、突然のスケジュール変更とかにはびっくりしてしまいます。いつもと同じであれば、何の迷いもありません。イマジネーションの困難さを持っている子どもたちは、本当に毎日、とても不安な生活を過ごしていることはたくさんあります。それは、見えないものはないもの、見えないものはわからないということです。

<p>AD/HDの特性</p> <ul style="list-style-type: none"> ■多動性 ■衝動性 ■不注意性 	<p>学習障がいの特性</p> <ul style="list-style-type: none"> ■読字障害 ■算数障害 ■書字表出障害など 	<p>運動協調性障がいの特性</p> <ul style="list-style-type: none"> ■手と目の協応 ■感覚の受け取りかたが独特で自分で調整ができない
---	---	--

以前は、ADHDは、「予後はどうでもよい。だんだん落ち着いてくるから」と言われていましたが、決してそんなことはありません。確かに多少「多動」な部分は落ち着いてきますが、「注意」の部分では、困難性は戻っていきます。ADHDの一番大変なところは、思い付いたことをすぐ行動してしまうことで、失敗することもとても多くて、自信がなくなっていくことで、つらい感じがあります。

ADHDは、左脳の部分です。左脳と右脳には役割分担があって、左脳はどちらかというと、順次処理をつかさどります。右脳は、同時処理をつかさどります。左脳よりも、むしろ右脳の同時処理の部分がなかなか成熟しにくいことで、目の前にあるものをすぐやりたくてしまう、それは左脳がとても動くということでもあり、同時処理がなかなか難しいことが出てきます。

学習障がいは、読み書き、そろばんが全体的にできないわけではなくて、ある一部分の問題がとても不得手です。書字は思う以上にたくさんありますが、ラッキーなことにパソコンができたので、大きくなったら楽になりますが、学生の時代は大変です。学校教育に「アイパッド (iPad)」が入ると言う話も出ていますから、そうなってくると、書字障がいが「障がい」と呼ばれなくなってくる可能性が出てきます。

実は、あまり表面には出てきませんが、発達性協調運動障がいをたくさん持っている方は多いようです。この障がいの特性は、きちんとサポートされていないと働くときにすごく困ることです。今日は、ここだけに焦点を当てて話をします。

学習障がいは、ある程度どうやってサポートしていけばいいかは、世の中にはたくさん出回っています。ADHDもそうです。自信を失わせないかわりをします。自閉症スペクトラムもそうです。見通しであるとか、具体的に丁寧にその子どもたちに合ったサポートをしていこうということ、かなりいろいろな手の差し伸べ方が紹介されています。発達性協調運動障がいは、幼少期になかなかサポートされないことが多く、そのまま大きくなってしまふことがあります。

どうということかという点、大きい運動と小さい運動で、いわゆる「ぶきっちゃん」、「ぶきっちゃん」と言われることが多いようですが、そこで疎外感を持っている子どもたちです。

例えば身だしなみで言うと、大きな運動では、着替えが小さいころから下手だった。小さな運動では、ボタンが閉められない。学習だと、縄跳びとか跳び箱がなかなかうまくいかない。学習だと書くことがうまくいかない。もっと小さい子の遊びだと、自転車に乗るのがうまくいかない。あるいは、折り紙が折れない。

この辺りです。この辺りは、実は、「ぶきっちょだな」と思われながら、するっとされることが多くて、すごく特訓をされて運動嫌いになっていくことも結構あります。今日は、この辺りの紹介ができればと思っています。

この辺は、皆さんはよく知っていることだと思うので、さらっと言います。発達障がいのある方にとって共通項でよく言われているのは、前頭葉の部分がかさどっている実行機能です。ものごとを計画して実行していく、段取りをつける、優先順位をつける、この辺りが苦手です。詳しい脳の話はここではしません。

あと、全体を把握する力が弱いようです。「木を見て森を見ず」という言葉がありますが、どちらかというと、「葉っぱを見て森を見ない」というくらい、とても細やかなところに目が行き届きます。しかし、これは何が困るかというと、道が覚えられません。

実は、ここ1週間自転車で乗れない、道が覚えられないということで相談を受けたのが、たまたま3回続きました。うちから学校まで親御さんが車で送っています。私の事務所は群馬なので車を頻りに利用します。そのお子さんは、今中学生ですが、「中学生になったから、自分で自転車に乗って学校に行ってもらいたい。何度も車で連れて行って、『ここを曲がるんだよ。ここを真っすぐ行くんだよ』と言っているのだけれども、全然覚えられない。もういいかげん嫌だ」ということで相談に来られました。

これは、結構当たり前の話なのです。皆さんも、「この会場から最寄りの六本木駅まで道を案内してください」と言ったら、多分、全員目印にしているものが違います。もうちょっと広い道で言うと、われわれが目印にするのは、大抵は信号の交差点の名前であったり、大きな建物であったり、比較的視野を広くし、覚えやすいものを覚え、それを人に紹介して道を教えています。

でも、この全体を把握する力が弱いと、どこを見ているかということ、よくあるのは、ある店の看板に書かれている「どくろのマーク」だったり、「まっちゃんラーメン」という店名の「まっちゃん」の下に書いてある電話番号でした。

彼らが好きなマークであるとか、文字であるとか、細やかな部分を覚えて道を覚えるので、その子どもたちに「群馬中学という標識のある交差点を左に曲がって」と言っても、それを見ていませんので、それはいったいどこだろうという話になります。ですので、道を覚えるときは、一緒に歩いていって、「ここで曲がります。ここで君が目印は何だ」と言って、どくろのマークでも、小鳥のマークでもいいですが、そこでデジカメで写真を撮って、最後は地図にそのポイントを張っておきます。

こういったところで、見ている部分が比較的細やかなところを見ているので、道を覚えるときは大抵そうしています。自分の好きなマークとか、石とか好きなので、緑石とかを見ていることもありますので、緑石がどこかにいかにいいないつも思っています。そういったところを見ている可能性があります。

ここの議論の問題は、「そうだ」という先生と、「そうではない」という先生と二分されている問題ですので、審議のほどは確かではありませんが、「自分がされて嫌なことは、相手も嫌なのだ。自分が興味のあることが、相手も全部興味があるとは限らない」という概念が、なかなか入りにくいのです。なので、自分が昨日見たテレビの内容は全員が知っているはずで、興味があると思っているので、それを延々に話しても、それは何でもないというところに行き着いて、「もう、何々くんの話はいいよ」となってしまうがちです。



今日のテーマの「感覚運動機能」です。ここから、多少脳の話になりますので、覚醒水準が下がる可能性があります。これから覚醒水準をちょっと上げることを皆さんとしますので、ご協力お願いします。何かというとじゃんけんです。私とじゃんけんをしてもらいます。必ず私に勝ってください。だから、後出して構いません。

ちょっと試しに1回やりませう。じゃんけんばい。ありがとうございます。ここで皆さん静かにされると、私はしょんぼりするので、できたら、「じゃんけんばい」と言ったら、「ばい」と声を出しながら、私に勝ってください。よろしいでしょうか？ だんだん遠くなります。ではスタート！

石川 じゃんけんばい！

参加者 ばい！

石川 じゃんけんばい！

参加者 ばい！

石川 じゃんけんばい！

参加者 ばい！

石川 じゃんけんばい！

参加者 ばい！

石川 ちょっと怪しい人がいます。そうしたら、今度は負けてください。

私がグーを出したら、皆さんはチョキです。必ず負けてください。

よろしいでしょうか？ ちょっと緊張します。いきます。

石川 じゃんけんばい！

参加者 ばい！

石川 じゃんけんばい！

参加者 ばい！

石川 じゃんけんばい！

参加者 ばい！

石川 ああ、もう怪しくなった。もう1回です。じゃんけんばい！

参加者 ばい！

石川 ありがとうございます。どちらが楽ですか。

参加者 勝つほうです。

石川 はい。人間は本当に勝つように仕組まれているので、「勝つ」という概念のほうが先行しているので、楽かと思えます。

今、覚醒水準の話をしました。子どもの中で、ぼーっとしたりする、いつも話を聞いているのか、聞いていないのかわからない、聞き漏らしがある覚醒水準がもともと高くない子どもがいます。だから、授業中も姿勢がだんだん崩れたりします。覚醒水準はある一定度上げておかないと、授業であったり、仕事であったりが難しくなるので、ぼーっとしてしまいがちな比較的反応がなさそうな子どもたちは、授業とか仕事の前に、ちょっと筋肉を使う運動をしてもらっています。

覚醒水準を上げるには、運動が一番いいです。ちょっと今運動してもらったので、ちょっとだけ覚醒水準が上がったはずですが、でも、そのうちまた下がっていくので、そしたら伸びをよくやりますが、伸びも筋肉が伸びていく刺激を脳に入れるので、覚醒が上がっていきます。

ですので、もし、この会場に先生がいて、授業をずっと続けているのが難しそうな生徒がいたら、先生のお手伝いをしてもらって、できるだけ重たい荷物を運んでもらいます。英語の辞書などはとてもいいです。あいうものを一緒に取りに来てもらって、持っていってもらってみんなに配ります。みんなにも役に立っ

実行機能の弱さ

計画して実行すること...例:自転車に乗る

全体を把握する力の弱さ

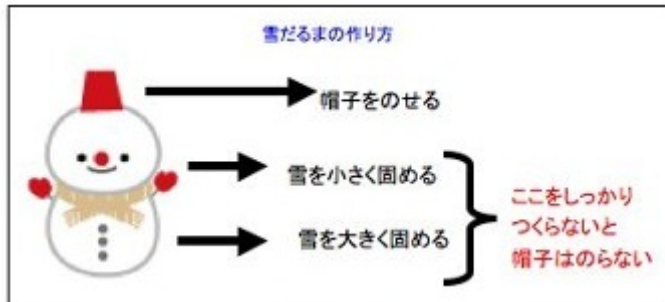
木を見て森を見ず...例:道を覚える

心の理論の問題

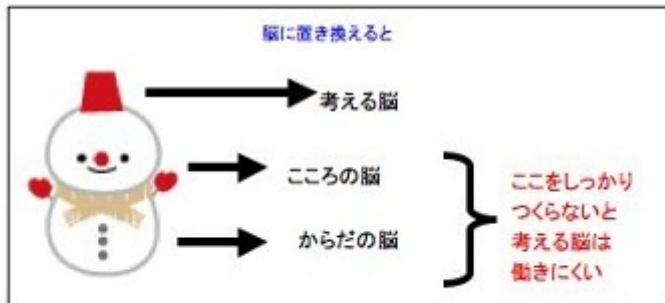
例:自分がされて嫌な(興味ある)ことは他人も嫌(興味ある)

てすばらしい行動です。ここにも刺激が入るので、45分とか50分もつ可能性があるのですが、覚醒水準が下がっている子がいたら、ぜひそうしてください。

脳の話をする前に、脳を雪だるまと思ってください。雪だるまの作り方は、皆さん多分知っていますね。最初から帽子に着手する人はいません。一番下の胴体の部分を大きく固めます。そのあとに頭を載せます。それで、やっと帽子を載せます。帽子を載せるためには、この二つがしっかりしていないと、帽子はすぐ落ちてしまいます。



実は、脳の構造もこれと同じになっています。一番下の「体の脳」と言われているものがしっかりすることによって、その上の「心の脳」が整理整頓され、最後に「考える」という極めて高機能な部分が働くようになっています。雪だるまを思い出しながら脳を見てもらうと、さっきの「体」は、脳幹という首から脳に行くまでの部分、その上に大脳辺縁系という部分があって、最後に大脳の新皮質に情報が流れていくルートを通ります。



先ほどのピカピカと電気信号が入ってきたのと同じ図です。感覚が入って、ここから電線がきちんと配線されて、最後に電球に行き着くという流れを通ります。大脳新皮質は、考えたり、話したり、計算したり、行動を組み立てたりするところです。それをすると、われわれは自然にできていますが、実は、それはこの脳幹と大脳辺縁系のところがしっかりしているから、われわれは考えられるようになっています。

どうということかという、ここから入ってくる感覚がたくさん整理されないで入っていき、スイッチの「オン・オフ」の機能が、ずっとオンのままになっていたり、あるいは、ここからの配線がうまくつながらなくて、計算が苦手になったり、運動が苦手になったり、言葉の理解がなかなか進まなかったりします。この感覚刺激がうまく整理整頓されないことで、最終的な副産物である「考える脳」のところまできちんと情報が行き渡らないことがあって、学習障がいであるとか、注意欠陥に行き着きます。

その感覚は、5種類くらいあります。目の視覚情報、耳からの聴覚、触るという触覚までは、皆さん自分でもよくわかる感覚です。あと二つ重要な感覚があって、「前庭覚」と言います。聞いたことがある方はそんなにたくさんはないと思います。何かというと平行感覚です。それから、「固有受容覚」です。力の入り具合、今、どのくらい曲がっているとか、腕はどの辺りにあるとか、そういった感覚です。

この感覚がうまく整理整頓されていくと、われわれは姿勢を保つことができるようになっていきます。平行感覚がめちゃくちゃだと、姿勢は崩れていきます。生徒や子どもの中で姿勢が崩れやすい、食べるときこんなになってしまう。あとは、だんといつも寝そべっている。そのときに、よく入る指導は、筋肉が弱いだろうということで、腹筋とか筋力体操をさせます。それも大事ですが、もう一つ大事なのは、平衡感覚です。なぜかという、重力に対して真っすぐ立っているという刺激がちゃんと入っているかどうかです。そこに脳の刺激が整理整頓されないで入っていかないと、姿勢は崩れていきます。

われわれは、姿勢を保って、初めて自分の体がイメージできます。ボディイメージです。自分の体が初めてどのくらいかわかって、ものとの距離がわかってきます。それによって、最終的に書いたり、読んだりすることができるようになるという発達を遂げていきます。

この辺りの感覚がうまく統合されていないと、いくら「読み書きそろばんを頑張れ」と言っても、脳幹の部分、雪だるまの一番下のところがしっかりしていない

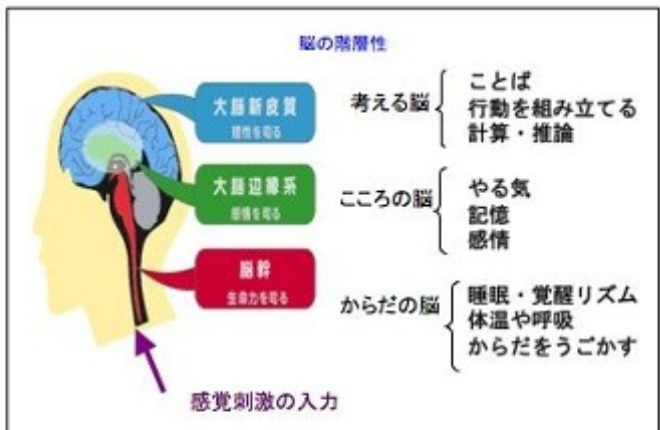
と、いくら帽子を載せようと思っても、落ちてしまいます。

「発達障がいの特性のある子どもたち・若者たちは、この感覚の統合がなかなかうまくいかない方が多い」と言われています。今、皆さんは真っすぐ立っている

ので、多分、前庭覚という平衡感覚が入っていると思います。バランスボールをやると、こうなっても、こう戻ります。下がったままで倒れないように、なるべく重力に対して真っすぐになるように、われわれはバランスを取ろうとします。これは筋肉と耳の中にあるセンサーのおかげです。

平行感覚は三半規管と耳石が上下、前後、横、左右、傾斜、スピードをセンサーで感じ取っているので、私たちは真っすぐ立っていられます。前庭覚という平衡感覚が入りにくい子どもは、ぐるぐる回っていても目が回りません。昔ありましたが、野球のバットをくっつけて、ぐるぐると回ってグッシュします。あれは大概目が回るのでグッシュできませんが、多分、この感覚の反応があまり入ってこない子どもだったら、ぐるぐる回っていても目が回りません。

でも、大変なことは、眼球運動がなかなか結び付かないことがあります。眼球運動が動かないと、書字がなかなか難しいです。黒板の字を見て書き写す眼球運動がなかなか難しいです。そういうところにつながってきます。



皆さん、ちょっと試してください。これから目を閉じてもらって、左の腕とか指、何でもいいですが、ある形を作ってください。どんな角度でもいいです。曲げても伸ばしても、前に出しても、Vサインを出しても、OKサインでも何でもいいです。左手でそういう形を作って、目をつむって、同じ形を右手で作ってください。戸惑っている方はいないようです。目を開けると、ほとんど同じ形になっているはず。目を開けなくても、なぜできるか。

例えば、見ないで頭の上でピースサインを作ってください。これは、目の情報ではなく、固有受容覚と言いますが、体の動きを感じる感覚がちゃんと入っているから、見なくてもできます。ここが入ってうまく感覚が統合されていないと、見ないとわかりません。

そうすると、何が難しいかという、見えないものが見えません。「こたつの中に入った、自分の足がどこにあるかわからない」というお子さんがいます。われわれは固有受容覚が入っているから、何となくそこにあるものがわかりますが、その子にはわかりません。

あとよくあるのは、体をいろいろなところにぶつけます。自分の体の大きさと、このくらいの細さがどのくらいかわからないので、よくぶつけています。一番大変なのは、背中は見えないから、人と歩いていると背中がぶつかってしまいます。こういうところに、すごく難しさを持っています。この感覚を統合していくことが、結局は最終的な読み書きそろばんにつながっていくし、できていくことで自信が備わっていきます。

想像するとわかると思いますが、「いつも姿勢が悪い」と言われて怒られて、「おまえは筋トレ100回だ」と言われて、腹筋を100回やっても、姿勢が崩れるということで、「やっぱり、俺はだめだ」と自信をなくします。

あとは小学生になって、男子児童は運動ができないと、自信をどんどんなくしていくことがあると思います。自分の運動だけでなく、イメージがなかなか養われにくいのです。

それを、「もっとちゃんとやれ」とか、「よく見る」と言われても、うまくいきにくいのです。

実は、こういった面をたくさん若者や子どもが持っています。今の特別支援教育が入ってきて、特別支援コーディネーターの先生とか、養護の先生も含めて、こういう支援から始めている学校も増えているので、今、学齢期にある子どもたちは、無理矢理書けという指導が少なくなっています。しかし、既に成人になっている若者は、彼らが幼少期・学齢期には、われわれは、こういった考え方とか知識を持っていませんでしたので、ほぼ気合いで頑張る、努力が足りないと言ったりしてきました。でも、実は、さっきの書字、漢字を100回書いてもうまくいかないことのほうが多くて自信を持ちにくかったのです。

それと、いまだにこの感覚統合が進んでいなくて、体の動かし方がごちな

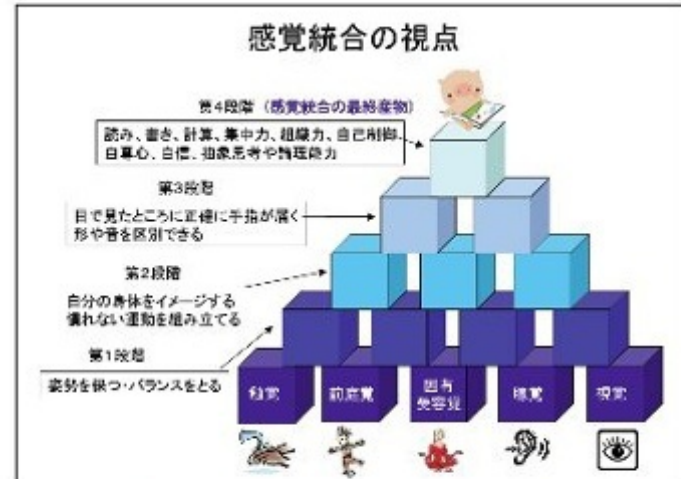
くて、自分のボディイメージがないが故に、例えば、組み立ての作業でも、単純作業で経時的な動作だから得意だろうと思われて工場を紹介されます。しかし、そもそも自分の姿勢が崩れやすかったら、50分、1時間くらいが限度で、とてでもではないですが、8時間姿勢を保って仕事をするのは難しくなります。

組み立ても、組み立て作業という運動を計画して実行する作業になるので、2段階目、3段階目をクリアしていなければ、その仕事もなかなか難しいのです。

実は、アスペルガーやADHDや学習障がい特性ももちろんですが、彼らが持っている運動の機能、感覚の部分の困り感も大きいのです。

それで、もっと大きい問題は、感覚の問題なので、その人しかわからないことです。私が感じている感覚と皆さんが感じる感覚が、同じとは限りません。

翻訳家のニキリンコさんは触覚過敏で、シャワーとか雨が、本当に針で刺されるように高いそうです。でも、みんな我慢してシャワーを浴びていると思っていたので、自らが訴えることがありませんでした。みんな我慢しているとか、みんなそうだと思っているから、この感覚や運動がなかなかうまくいかないものを、子ども自身が訴えるチャンスがありません。



ですので、姿勢がちょっと保ちにくいとか、動作が「ぶさっちょ」をちょっと超えている。あるいは、書字でも読み書きでもいいですが、目が動かないとか、そういったところにわれわれ周囲の大人が気付けると、一番ベースラインに戻って、何らかの支援ができる可能性があります。

どうしても、「ソーシャルスキル」と言って、「対人関係のロールプレイをしましょう」となることもあって、それは、有効な手でもありますが、大事なことは、自分の体をコントロールできるという感覚を、子どもたちが小さいころから持てるとういと感じます。

この感覚の統合は、頭で考えているだけでは統合されません。基本的には、遊びなどの活動です。小さい頃は、遊べるといいのですが、大人になるとさすがに公園で大きいお兄ちゃんが1人で遊んでいると、「あの子はいったいどうしたのか」と見えるので、実は、大人になってこの感覚を統合していくのは、なかなか機会が少ないのです。

もし、この会場に小学校とか幼稚園の先生がいたら、お勤めしたい遊びがたくさんあります。

平衡感覚は、重力に対して真っすぐ立っている感覚なので、イメージとしてはバンジージャンプみたいな遊びです。体を伸ばし、かつ下っていく遊びが一番いいので、バンジージャンプはできなくても、滑り台とか坂とか土手とかを頭から滑っていくとかです。

一番いいのは、トランポリンです。揺れも入るし、上下の感覚もすこく入るので、すこくよくなって、感覚が入りやすくなります。

大人は、さすがに滑り台は難しいので、うちでは、トランポリンより大きいエアボリンという、この会場の3分の1ぐらいの大きな空気を入れるものがあるので、そこで跳んだりします。ヨガもいいです。あとは、バランスボールも大人がやって愛ではありませんので、ああいうのでバランス感覚を取ってもらいます。あと、ロデオボーイとか乗馬（JOBA/ジョーバ）です。多分、どこかのうちには限られていると思うので、乗馬も揺れを全部入れるので、よい運動と言われています。

感覚、脳の整理整頓の話なので、小さければ小さいほど、感覚は統合されやすくなっていくので、皆さんがかかわっている子どもが小さければ小さいほど、心の部分に手を入れていけて、大人になったときの不自由さが薄れていきます。こういう状況、感覚がなかなかうまく統合されにくいと、表に出てくる行動としては、こんなものになっていきます。



運動にいろいろかかわっている問題です。教室の中で集中が続かないことはよくあります。集中力が続かないのは、覚醒水準の問題です。覚醒が落ちやすい子、あとは、覚醒が上がりにやすい子もいます。もともと覚醒がすこく高く敏感で、何かあったらすぐ「ぎゃー」と反応する子どももいるし、ぼーっとしている子どももいます。

でも、一番困っているのは、覚醒がどんどんたまっていくタイプです。私たちは、ご飯を食べると覚醒が上がって、ご飯を食べ終わると少し眠くなってきます。勉強しているときにまた高くなって、勉強が終わると少し覚醒が下がるといふふうに、山のように覚醒がうまくコントロールされています。

発達障がいの特性がある子たちは、こういうふうになります。ご飯を食べました。学校に登校します。授業を受けます。休憩中に友達と話をします。友達が途中で自分の肩に触れました。その瞬間に覚醒水準が積み重なってピークになっていることがあります。そうすると、どういふことが起きるかという、ちょっと触れただけで、「何だよ、おまえ！」という暴言になったり、暴れたりします。われわれ周囲から見ると、何でいきなり怒り出したのか。どうしたのかと思います。

感覚の統合も一つですが、集中とかパニックが積み重なってピークのときに、たまたま何かの刺激が最後に一つぴよんと入ったことによって、ドカーンと爆発することもあります。ですので、今日は、ぜひ感覚運動のところを持ち帰ってもらいたいと考えています。

こんな状況が生じやすい

- ・教室の中で集中がつづかない
- ・落ち着きがない、ぼーっとしている
- ・突然パニック、お友だをたたいたり、暴言を吐く
- ・楽器や運動が苦手
- ・姿勢が崩れやすい
- ・おとなしくて活動に参加したげらない
- ・読み、書き、計算など勉強が苦手でノートがとれない
- ・すぐ怒り出すなど感情的になる、不安が強い
- ・新しいことをやりたげらない
- ・偏食
- ・先生の話聞いていない
- ・物の扱いが乱暴
- ・整理整頓が苦手

真の目的は、その子どもたちがその社会の環境の中で、自信を持って、安心して生きていけることです。

具体的に支援計画を立てるときには、さまざまなポイントで立てる必要があります。この「土台作り」と言ったのは、今の感覚とか運動のところ。はずせない彼らのいいところを伸ばして、なかなかこの障がい特性によってできない部分は、ほかにいろいろ補完できるものを探していきます。構造化は、皆さんよく知っていることですから、構造化の話はここでは避けます。

もう一つ、その子たちのやる気の源泉を比較の見逃しがちです。やはり、ある一定の子どもは、とても大変です。われわれは、自然にいろいろなものが発達してこまて来ています。無意識にできているものはたくさんありますが、感覚の統合、あるいは発達障がいの特性を持っている子どもたちは、全部マニュアルで操作しているのと同じようなものなので、好きな活動だけに没頭したくなるのもわかるぐらい、本当に大変な毎日を送っています。

その彼ら、彼女らに新しい学習や活動を学んでもらうときには、やはりその子たちのやる気がどこにあるのかを見つけることです。

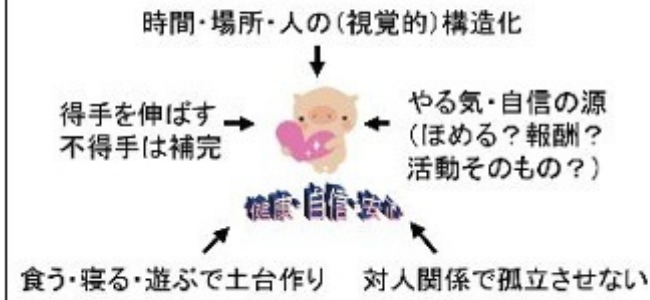
よく出回っている本だと、「ほめて伸ばせ。『よくできたね』とほめる」ということが言われています。これは、本当にとても大事です。でも、ほめるというのは、対人関係の中で生まれてくるものです。人の気持ちの読み取りがなかなか難しかったりする子どもたちが、ほめるという行為がどういふことなのかを理解していなかったら、「よくできたね」、「偉いね」、「すこいね」といくら言っても、それはただ一つの言葉の可能性がありま。

いくらほめても全然反応しない子どもは、たくさんいます。表情がないから、照れているのかと思いますが、そうではなくて、ほめられていることがどういふことが理解しにくかったりします。そういうときには、ほかにやる気の源泉が何かないかを、ぜひ見つけておきたいと思っています。

一つは、本当によくほめて、「よくできたね」、「大人になったね」、「やっぱりできるのは、男の子だね」みたいにほめることです。

もう一つは、ご褒美です。何々が終わったら何々というご褒美、おやつでも何でもいいです。もっと効くのは、好きな活動そのものが彼らのやる気の源泉です。

支援を実施する視点



われわれは、いつもここから始めます。その方がどこにやる気を持っているのか、どのようにしてものごとを学習して、身に着けていったのかというところにたくさんヒントがあるので、もし、この会場に先生や親御さんがいたら、その子どものやる気とか自信の源になっているものが何か、ほめることだけではないことをお伝えできればと思います。

以上で話を終わります。小さな子ども向けの話をもとにしました。

今回の話で不足しているところが多々あると思います。もう少しこのところはどうだろうということがありましたら、教えてください。よろしくお願いします。



感覚統合のほかにも

ABA
TEACCH
認知行動療法
ESDM
言語訓練・作業訓練

…など、さまざまな支援方法がある。

目的

発達支援(特性理解と対応)とは
その子どもたちが暮らす環境の中で
健康と自信や安心を支えることが目的

講師・石川京子さん、プロフィール

1967年生 臨床心理士 群馬県出身。

津田塾大学英文科卒業後、(株)リクルートに就職し人材採用・人材教育の仕事に従事するが、「人は職場環境から精神的に大きな影響を受けている」ことに対する援助対策がないことを痛感し、お茶の水大学へ編入学、発達臨床心理学を学び、東京大学大学院教育学研究科臨床心理学修士課程修了。

発達障害のある若者の就労支援および発達障害のある子どもと家族への療育支援に数多く従事。現在、群馬を中心に全国から講演、指導の依頼が数多く来ている。

働く大人を目指している、発達障害のある若者および生徒にどう向き合っていくべきか悩める方々の指導においての若手リーダー的存在。

群馬県特別支援専門家チーム委員。群馬県スクールカウンセラー。

ぐんま若者サポートステーション臨床心理士相談員。

NPO法人リンケージ理事長 (<http://npo-linkage.net/index.html>)。

特定非営利活動法人 二十一世紀教育研究所とは

21世紀教育研究所は、現代教育問題の調査/研究機関として1994年11月に設立された民間の非営利団体です。とりわけ、深刻な社会問題となり、適切な対応が求められている「不登校」「いじめ」「高校中退」「少年犯罪」には設立当初から積極的に取り組み、幅広い調査に基づいた具体的な情報を提供するとともに、電話/来訪による相談を通して個別のメンタルケアを行ってきました。

また、新しい教育の在り方を探るべく、講演会、セミナー、シンポジウムを開催。そして、アメリカで注目されていたチャータースクール(公設民営の公立学校)の視察や教育特区をテーマにしたセミナーなどを行ってきました。

さらに、不登校や高校中退経験者をバックアップするために、全国のフリースクール、サポート校、大検予備校などの情報を掲載した3冊の書籍を出版しました。また、そうした"新しい学びの場"の情報をウェブ上で提供するためのデータベース作成にも取り組んでいます。

子どもたちの成長を支える教育のフィールドは、家庭の問題、社会の問題といった単一的な見方をするのではなく、行政、民間双方が広角的視線で捉え、ポジティブに働きかけることによって、改善、整備されていくものです。

当研究所は、これまでとかく分断されがちだった家庭、学校、地域社会、企業、市民団体、行政を結ぶネットワークとして機能することにより、官民の壁を超えた情報収集、相互連携、そして交流の場作りを目指しています。

教育問題はさらに多様化かつ複雑化していくことが予測されますが、当研究所の広範囲にわたる活動が問題解決の糸口に繋がることを願い、今後も様々な立場の人々のサポートに努めていきたいと考えています。

子どもの発達障がい ... その特性と対応について

<http://p.booklog.jp/book/23570>

著者 : yoyogi4450

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/yoyogi4450/profile>

発行所 : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/23570>

ブクログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/23570>